赤十字新聞

The Red Cross Journal Japanese Red Cross Society publication

■編集・発行／日本赤十字社　企画広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3　TEL.03-3438-1311
一部20円　赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

1 Jan 2011

Vol.848 http://www.jrc.or.jp

日本赤十字社 Japanese Red Cross Society

新年あけましておめでとうございます

今年も「苦しんでいる人を救う」という赤十字の使命をしっかりと果たしてまいります

日本赤十字社社長
国際赤十字・赤新月社連盟会長
近衛　忠煇

皆さま、明けましておめでとうございます。

一昨年11月、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の会長に選出され、昨年は1年で15カ国を回るという非常にあわただしい年になりました。アジア、ヨーロッパ、中南米各国の訪問を通して、それぞれの赤十字社がこれからの活動のあり方について、真剣に模索していることについて共に考えてきました。

赤十字の国際連帯強めた1年

1月にハイチ大地震、9月にパキスタン大洪水の現場に入りました。どちらも歴史に残る大災害でしたが、特にハイチでは各国からおよそ90の赤十字がいろいろな形で救援活動に参加し、赤十字の歴史でも特筆される活動が展開されました。

これまで国際救援の表舞台にはあまり出てこなかったイスラム諸国やイスラエル、さらに以前は援助を受ける側にいた国の赤十字社も救援活動に駆けつけました。赤十字運動の国際的な連帯感が非常に強まった証です。

世界中で相次いだ大災害で赤十字の「連帯の精神」が発揮されたことを心強く思う一方、いっそうの連帯の強化のためにはどのような協力や工夫が必要なのかを考えることが今後の課題です。

ヨーロッパで最も関心が高い移民問題、世界的な異常気象、多発する大規模災害などに対応するためには、さらなるグローバルな視点と協力なくしては活動できません。

国際人道法違反の核兵器廃絶を

昨年11月、広島市で「ノーベル平和賞受賞者世界サミット」が開かれ、私もIFRC会長として核兵器廃絶に向けた議論に参加しました。そこで、「国際人道法に明らかに違反する兵器の存在をこれ以上見過ごすことはできない」と訴えました。

核兵器問題について、赤十字はこれまであまり表に立ってはきませんでしたが、広島に原爆が落とされたとき、広島赤十字病院が被爆者救援の拠点となり、終戦直後に赤十字国際委員会（ICRC）駐日首席代表のジュノー博士が15トンもの医薬品を届けるなど、核兵器と赤十字は深いかかわりがあります。

核兵器の使用は国際人道法に違反するという赤十字の考えは、国連のさまざまな会議や国際司法裁判所でも認められてきました。抑止力としても意味がないという議論も強まっています。核兵器の問題は極めて政治色が強いものですが、人道問題として議論する土壌がだいぶ整ってきたと感じています。

対人地雷やクラスター爆弾の使用禁止は、戦時救護にあたっていた現場の赤十字スタッフの声が国際社会を動かした面があります。国際人道法に違反する核兵器の廃絶についても、実現に向けた現実的シナリオを考えていく必要があります。

若い世代に向けた取り組み強化へ

日本赤十字社では献血やボランティア活動などをめぐって、若い世代に訴える取り組みを強めています。

これからの世界は、いろいろな意味で私たちが過去に経験したことがないような世界になると思います。ですから、赤十字のさまざまな活動も過去にやってきたことをただ踏襲すればよいというわけにはいきません。

青少年赤十字（JRC）は「気づき」「考え」「実行する」ということをモットーとしていますが、赤十字活動は今まさにこのことが求められています。

186社を見渡しても「若者の意見が赤十字活動に反映されていない」「もっと若者の声を取り上げてほしい」という意見がよく出ます。北欧諸国などでは若い人の赤十字の活動への参加が進んでいますが、日本を含めて国際的には青少年の参加はまだ遅れているというのが現状です。

皆さまのご協力で成り立つ赤十字運動

さて、日本赤十字社では赤十字の取り組みを積極的に外に発信していくことや、そのために職員が支部や施設の垣根を超えて交流していくことをめざして、4年前から「もっとクロス！」活動を実践しています。この取り組みを通じて、お互いの仕事に関心をもち、もっとお互いに知恵を出していこうという認識が強まっています。

こうしたなかで培われた一体感は、例えば大きな災害が起きた際に活かされ、事業の面でも効果を発揮することでしょう。

社資の低落傾向や若者の献血離れが懸念されるなかで、日本赤十字社に協力してくださる方々や団体、企業、行政などと今後、どのように「クロス！（連携）」していくのかが大きな課題になっています。

赤十字は多くの方々の協力があってこそ成り立っている組織です。皆さんの協力そのものが赤十字の活動ともいえます。どうか、皆さまには赤十字運動の一員であるということを誇りにしていただくとともに、そのお気持ちを周囲の方々によりいっそう広げていただくことをお願いしたいと思います。

紀香先生が小学校で訪問授業

絵本「赤十字をつくった人 アンリー・デュナン」を朗読

赤十字広報特使の藤原紀香さんが12月20日、JRC加盟校の東京都新宿区立大久保小学校を訪問し、6年生児童を対象に世界の人たちと助け合うことの大切さなどを学ぶ授業を行いました。

藤原さんは、特使として昨年訪問したケニア共和国の取材体験や阪神・淡路大震災での被災体験を紹介するとともに日本赤十字社が制作した絵本「赤十字をつくった人 アンリー・デュナン」を朗読。

「世界の人と仲良くする最初の一歩として、隣のクラスの子など身近な友達と仲良くするのが大切です」と呼びかけました。

（訪問授業と絵本の詳細は2面に掲載）

赤十字広報特使
藤原紀香さん

小学校訪問し赤十字の授業

「日本で生まれたいのちも、貧しい国で生まれたいのちも同じ。遠い国の話だと思わず、自分たちでできることを考えてくれたら――」。東京都新宿区立大久保小学校で6年生児童への授業を行った赤十字広報特使の藤原紀香さん。特使として訪問したケニア共和国では貧しさの中で幼いいのちが簡単に失われている現実を紹介し、いのちと助け合いの大切さを訴えかけました。

絵本を手に紀香先生を囲んで記念撮影

◆世界の人と心をつなげたい

藤原さんが広報特使として小学校を訪問したのは今回が初めてです。児童から拍手で迎えられた藤原さんは、担任の梅澤博史教諭からの「紀香先生と呼んでもいいですか」の問いに「ぜひ！」と笑顔で回答。なごやかな雰囲気の中、授業は進められました。

ケニア共和国を藤原さんが訪問したのは昨年3月。村から10キロも歩いて水汲みを行う不便な生活や大勢の乳幼児が簡単に亡くなっていく現実、そうした地域での日赤の活動などを映像を交えて紹介。「自分のことだけを考えるのではなく、こうした国に暮らす人のことも考えることが大切」と語りかけました。

◆自分を信じて行動しよう

藤原さんの話を聞いた児童からはたくさんの手が挙がり、「国や肌の色、言葉が違っても世界の人と心はつながると思いました」「世界のみんなが幸せになるには、私たちが仲良くして平和を願う気持ちを持つのが大事」などの感想が出されました。

今回の訪問授業で藤原さんは、赤十字の成り立ちを描いた絵本「赤十字をつくった人　アンリー・デュナン」の朗読も行いました。「アンリー・デュナンはどんな人？」の質問に、児童からは「人の痛みを分かる人だから、人を助けることができたと思います」といった答えが元気に寄せられました。

初めて先生として授業を体験した藤原さんは「いじめのように自分がされたら嫌なことは人にしない、自分がされたらうれしいことを他人にしてあげる。ボランティアやチャリティーなどは日本ではまだ照れ臭いと感じるかもしれないけど、自分を信じて行動してほしい。それはとても素敵なことで、未来につながる大切なことだと思います」とメッセージを贈りました。

絵本「赤十字をつくった人　アンリー・デュナン」

全国のJRC加盟小学校へ配付

絵本「赤十字をつくった人　アンリー・デュナン」は赤十字の父と呼ばれるデュナンの物語です。

戦場で負傷兵たちが十分な治療も受けられず放置されている惨状に直面したデュナンが戦時救護の必要性に気づき、その体験をもとに赤十字が生まれたこと、どんな状況でも苦しむ人を救うという赤十字の精神が、世界中に広がっていることを描いています。

絵本の対象は小学生。日赤では5万部を制作し、全国の青少年赤十字（JRC）加盟校に配付していきます。絵本のダウンロードサービスも1月末から始まる予定です。お問い合わせは日本赤十字社企画広報室（03－3437－7071 または koho@jrc.or.jp）まで。

石川遼選手先頭に「はたちの献血」キャンペーン

冬期の輸血用血液を確保し、医療機関へ血液製剤を安定的に供給するために毎年実施されている「はたちの献血」キャンペーン。今年も1月1日にスタートし、2月28日まで全国で取り組まれます。

「ぼくらも、いのちの、助けになれる。」

広報キャラクターは昨年に引き続きプロゴルファーの石川遼選手。若者の代表として、TV・ラジオCMなどに出演し、今年のメッセージ「ぼくらも、いのちの、助けになれる」の思いを熱く伝えていきます。

キャンペーンCMで石川選手は、輸血を受けて元気になった峰山真彩（みねやまま い）ちゃん（7歳）と対面。真彩ちゃんとの会話の中で、改めていのちの大切さに気づき、力強く献血を呼びかけるのも話題です。

献血推進映画「八月の二重奏」無料レンタル開始

日本赤十字社が企画した初の献血推進映画「八月の二重奏」。全国のレンタルビデオ店での無料レンタルがこのほど始まりました。

詳しくは、映画「八月の二重奏」特別サイト（http://www.cdvnet.jp/hachigatsu2）をご覧ください。

家庭で役立つ講習実技

おもちの事故を防ぎましょう

子どもや高齢者がおもちをのどに詰まらせる事故が多くなるお正月。おもちを食べる際は、以下のようなことに注意しましょう。

- 食べやすい姿勢を保つ
- 必要に応じて、食べやすい大きさや形に切る
- ゆっくりよくかんで食べる
- 食べ始めるときや、食べた後はお茶や汁物を取るようにする
- おもちを口に入れたまましゃべらないように気をつける
- 外れやすくなった入れ歯に気をつける――など

腹部突き上げ法

○詰まった場合の手当

強い咳をすると詰まったおもちが自然に出ることもあります。咳をさせてみて、咳ができるときは注意深く見守ってください。

上腹部を圧迫します（腹部突き上げ法・左図）。腹部突き上げ法を行った場合は、おもちが取れたときも速やかに医師の診察を受ける必要があります。

腹部を圧迫しても出ない場合は背中（肩甲骨の間）をたたきます（背部叩打法・右図）。

背部叩打法

●おもちなどを含む異物除去の方法は日赤の講習会でも学ぶことができます。

講習のお申し込みは、ナビダイヤル0570－0095で最寄の支部にお問い合わせください。

海外たすけあい義援金

人から人へ 善意のハートを全国につなげて

日本赤十字社がNHKと共同で取り組む「海外たすけあい」。12月1日にNHK放送センター（東京都渋谷区）で行われたオープニングイベントを皮切りに、各種赤十字奉仕団や、青少年赤十字（JRC）のメンバーなどが全国で義援金を呼びかける街頭活動を行いました。

【写真上】オープニングイベントでは、練馬白菊幼稚園の園児が手作り募金箱をキャンペーンシンボルキャラクターのミュージシャンMay.Jさん（右）に届けました
【写真左】募金箱の数を増やしたり、絆創膏とチラシをセットにするなどの工夫をして呼びかけました（香川）

女子プロ野球チーム・アストドリームスの選手も街頭キャンペーンに参加（京都）

ご協力ありがとうございました

【写真左】多くの来場者で賑わったチャリティーバザー（徳島） 【写真中】天候にめぐまれた海外たすけあい初日。多数の方にご協力いただきました（長野） 【写真右】高校生JRCメンバーも奉仕団員と共に呼びかけを行いました（福島）

「たすけあい」が支える フィリピン保健医療支援

神戸赤十字病院 森智恵子 看護師
（昨年6～12月 キリノ州で支援活動に従事）

事業でできた保健所で始めての赤ちゃんの誕生（森看護師は、写真中央）

医療従事者の不足や貧困などによって、キリノ州では医療サービスを受けるのが困難な状況です。日本赤十字社とフィリピン赤十字社は協力して、平成17年からこの地域で保健医療の支援活動を行っています。今年で6年目を迎えたこの支援事業にも「海外たすけあい」募金が活用されています。

こうした支援事業で大切なことは、「自分たちで守る」という意識です。そこで、地域保健ボランティアを育成・指導し、彼ら自身が保健衛生活動を行ったり、保健所の建設や給水設備の設置などをしていける援助を重視しています。

昨年10月の台風13号でフィリピンが被害を受けた際、私も被災地に入り被災状況の調査などを行いました。多くのボランティアが自身も被災者でありながら懸命に活動している光景を目にし、彼らの献身的な姿とやさしい笑顔に心を打たれました。

天皇皇后両陛下から御下賜金

12月15日、天皇皇后両陛下から、日本赤十字社の事業奨励のために金一封を賜りました。

この御下賜金は、災害などによる被災者救援事業のための資金として有意義に使用されます。

奄美地方大雨災害義援金

ご協力ありがとうございました

昨年10月20日、奄美地方を襲った大雨災害への義援金に11月30日現在で2645件、9126万3791円が寄せられました。皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。

常任理事会開催報告

平成22年12月17日、本社において平成22年度第8回の常任理事会が開催されました。

審議結果は左記のとおりです。

付議事項

1 資金の借入について
（武蔵野赤十字病院の電子カルテシステム導入にかかる資金の借入、高山赤十字病院の電子カルテシステム更新整備にかかる資金の借入）

2 予算の補正について
（高山赤十字病院の電子カルテシステム更新整備にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正、松江赤十字病院の改築工事に伴う島根県支部での寄付金の繰出にかかる一般会計歳入歳出予算の補正）

審議の結果、原案のとおり議決されました。

また、平成22年度「NHK海外たすけあい」募集実績額の速報値、日本赤十字社の開発協力事業、予算の補正にかかる11月分の社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

理事会審議報告

平成22年11月19日、理事会に文書による付議が行われました。

審議結果は左記のとおりです。

記

付議事項

1 資金の借入について
（釧路赤十字病院の借入金の繰上償還にかかる資金の借入）

2 予算の補正について
（釧路赤十字病院の借入金の繰上償還にかかる医療施設特別会計歳入歳出予算の補正）

今回の審議は、資金の借入及び予算の補正の時期の関係から文書をもって理事会に諮られましたが、理事会の構成役員（社長、副社長及び理事）現員62人のうち、61人から回答が寄せられ、61人全員が賛成しましたので、平成22年12月17日付で原案のとおり議決されました。

春夏秋冬

赤十字病院物語

第3回 往診と緊急医療支援と

清水赤十字病院（北海道）

当院のある清水町は北海道東部、十勝平野に位置する、酪農と畑作が盛んな人口1万人ほどの町です。昭和55年に町文化センターのオープンを記念して交響曲第九演奏会が開催され、以来5年に1度、プロの交響楽団の演奏で町民が合唱するコンサートを開く、「第九の町」としても知られます。

92床と、全国の赤十字病院のなかでも小さい規模で、病棟も2つしかありません。その分、科と科の垣根がなく、風通しがとてもいい病院です。

私は消化器内科医として内視鏡治療を専門にしています。確かに都会の病院より扱う件数は少ないのですが、レベル的には変わりません。規模は小さいけれど、高いクオリティーの医療を提供するというのが、当院の目指すところです。

週1回の往診も特長の一つです。若い人が都会に出て、高齢者だけで暮らしているという世帯が目立ちます。公共交通機関に恵まれず、車もない。タクシーは片道5千円という方もいます。町民にとって医療が非常に高価になっていることから、2年ほど前から往診を始め、皆さんにたいへん喜んでいただいています。

これからも時代のニーズに応えながら、質の高い医療を提供できる病院を目指したいと思っています。

私自身のことでいえば、一昨年はジンバブエに、本年2–3月には大地震に見舞われたハイチに、緊急医療支援チームの一員として派遣されました。学生時代から海外に興味があったのですが、赤十字病院に勤務する医師として自分の力をもっと使えないかと考え、手をあげたのがスタートです。

当院は医師が7人しかいないので、私が抜けると大変な面もありますが、傷ついている人を救いたいという気持ち、それこそが赤十字の原点。世界につながる活動を通して、町民の皆さんに赤十字病院ならではの特色を伝えていきたいです。

（清水赤十字病院消化器内科部長 藤城貴教（ふじき））

往診中の藤城医師

清水赤十字病院
北海道上川郡清水町南2条2丁目1番地
☎ 0156-62-2513
診療科目 内科／消化器内科／外科／整形外科／小児科

赤十字新聞 THE RED CROSS JOURNAL （第三種郵便物認可） 第848号

Report

ハイチ大地震から1年 被災地はいま

難しい復興、コレラ流行の中で支援継続中

～Build Back Better 震災前より良い状態へ～

2010年1月12日にハイチを襲った巨大地震から1年。赤十字をはじめ多くの支援団体による復興支援が続けられています。コレラの流行やハリケーン被害が追い打ちをかける状況の下、被災者の暮らしはどうなっているのか。ご支援をいただいた皆さまへのご報告のために、私たち取材チームは2010年11月初旬、ハイチを訪れました。

1804年に世界初の黒人共和国として生まれたハイチ。活気のあるマーケットや露天商、そして川に捨てられたゴミの山は、震災前からのハイチの姿。

「外国人が一人でキャンプに入るのは危険」

ハイチの首都ポルトープランスにある避難民キャンプの一つラピスト。地震直後から仮設診療所で活動するフィンランド赤十字社のドクターは、視察に訪れた私たちにこう警告しました。

震災前から国連の治安維持部隊が展開していたハイチ。地震直後には略奪や暴力行為が相次ぎました。震災から10カ月が経った時点でも、治安回復は十分とはいえません。

キャンプで支援物資を配る際、十分な数があることなどを事前に説明しないと、奪い合いで暴力沙汰になってしまうことすらあるといいます。

仕事がない。増える性暴力

西半球の最貧国で発生した死者22万人という震災。復興がひとすじ縄でいかないのは当然かもしれません。

街には崩れた建物のがれきがたくさん残り、道路には壊れた自動車やごみが散乱。ポルトープランスから日赤支援地のレオガンに向かう途中に渡った川はごみで埋めつくされていました。

避難民キャンプでは、小さなテントに4～5人が寝泊まりする窮屈な生活。ラピストにはそんなテントがギッシリと数千もひしめき合っています。こうしたキャンプ生活を送る人は100万人。多くの人たちには仕事がないといいます。

そうした中で性暴力被害を受ける女性が増える事態も。日赤から派遣されている助産師の長谷川文さんは「キャンプ生活はプライバシーが保てず、一人暮らしの女性が狙われやすい。働く場所がないイライラ感が性暴力を招いています」と指摘します。

「爪の中まで洗ってね！」小学生に歌を歌いながら手洗いを普及する松近真紀看護師（和歌山医療センターより派遣）

困難な状況でも続く復興

ハイチには赤十字をはじめ世界からの援助が集まっています。それでも復興がなかなか進まないのはなぜなのか？

原因の一つに首都が被災したことにより政府機能が低下したことがあげられます。震災前から国の災害対応能力は高くはありませんでした。

支援による仮設住宅を建てようにも、土地の所有権が複雑で、建設地確保が難しいこともありました。国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）の在ハイチ代表を務めるマーセル・フォーティエ氏は「コレラ流行やハリケーン被害なども足かせになっています。複雑な状況の下、ハイチ支援は何年も続くことになるでしょう」と語ります。

失われていない希望

「将来は海外の被災地などの支援に携わり、ハイチ支援への恩返しをしたい」―こんな夢を語ってくれたのは看護師のブスクルン・デスリンさんです。

震災後、日赤の仮設診療所で勤務し、勤務中に女の子を出産。現在もIFRCのトレーニングアシスタントとして、ハイチ赤十字ボランティアに衛生知識などを教えています。「赤十字のみなさんと緒に国民のために働けることを誇りに思っています」と笑顔を向けてくれました。

実はブスクルンさんも被災者の一人です。家を失い、震災後に夫は家出。3人の子どもとキャンプ生活を続けています。でも、私が会ったハイチの人々は彼女のように困難を抱えながらも希望を失ってはいません。

ハイチ赤十字社のミカエル・アミティ・ゲデオン社長は「復興は世界からの支援に頼らざるをえない状況です。でも、ハイチ人にも自分で立ち上がる力があるのです。皆さんの支援と私たちの努力で、ハイチは生まれ変われるはずです」と訴えました。

ハイチの人々への信頼の上に

私たちの支援は、ゲデオン社長の言う「ハイチ人の力」を信頼して進行中です。レオガンで保健事業を担当している長谷川さんは「地元スタッフに支えられています。キャンプの婦人会も協力的で、歌を通じた健康教育などに取り組んでいます」と話します。

性暴力からの女性保護も活動の一つです。性暴力を受けたときに被害を隠さないことなどをミニ集会で周知しています。この取り組みも長谷川さんとハイチ人看護師の二人三脚で進められていました。

このように地元の人々を通じて地域に情報発信、教育を行う理由は、「外部から与える知識は、現地に根づく力が弱い」からだといいます。同じくレオガンに派遣されている林まゆみさんも「与えるだけの支援では、私たち支援団体が去った後、元に戻ってしまいます」と指摘しました。

より良い明日へ一歩ずつ

こうした問題意識のもと、村の衛生環境を保つために何をするべきかを村人自身に気づいてもらう活動に日赤は取り組んでいます。村人とともに地面に地図を描き、そこに水源や井戸、トイレの場所などを記して議論。取り組むべき課題を共に考えます。

私たちが訪問した際に林さんが活動していた村は、トイレすらなく、川で用を足している地域。コレラなど感染症が発生すれば、深刻な事態が予想される場所です。

「穴を掘った場所をトイレにして、砂で埋めるなど初歩的なところから始めていきたい」。林さんからそんな話を聞いていると、村人が「私たちちゃんとトイレを作るからね」と訴えてくる姿が目に入りました。

一歩ずつかもしれませんが、ハイチの人々はより良い明日へ踏み出していました。

（写真：日本経済新聞社 写真部 浅原敬一郎
報告：日本赤十字社 企画広報室 松本彩香）

1 ハリケーンや地震に耐える住宅は今もっとも必要とされている支援。赤十字は3万戸の建設を予定している。
2 女性グループに保健・衛生知識を普及する長谷川文助産師（日赤医療センターより派遣）。11月はコレラ予防に重点を置いた。
3 女性グループは性暴力、感染症などから自分たちの身を守る方法をディスカッションする。
4 避難民キャンプから赤十字へ通勤し、ハイチ赤十字ボランティアへ講義をするブスクルンさん。
5 村人とともに地面に描いた地図を模造紙に記録し、今後の衛生環境改善につなげる。

「ここは皆さんの村です。皆さんで改善策を考えてください」と伝える林まゆみ駐在員

ハイチ救援金と使途（予定含む）

Ⓐ:赤十字全体の救援活動への支援……1億300万円
Ⓑ:医療救援活動……3億3,800万円
Ⓒ:保健／給水・衛生事業……9億1,600万円
Ⓓ:被災地の能力強化……7,000万円
Ⓔ:コレラ対応……4,500万円
Ⓕ:策定中の復興支援事業等……5億8,500万円
Ⓖ:事務運営・管理費……5,200万円

テレビ、インターネットでもハイチ特集

ハイチでの日赤の支援活動を紹介するテレビ番組が放送されるほか、写真展、ホームページでも特集します。

テレビ番組
■1月8日（土）12:30～13:00「ハイチ大地震から1年 被災地のいま」（BS Japan）

ハイチ特設WEBサイト
www.jrc-haiti.jp 1年間の事業内容紹介のほか、スタッフの声などを写真や動画とともにお届けします。

写真展「あれから1年～ハイチ大地震を乗り越えて～」
■会　場＝SPACE NIO（東京都千代田区大手町1-3-7 日本経済新聞社 東京本社ビル2F）
■開催時期＝1月5日（水）～14日（金）
■開催時間＝平日午前10時～午後6時（最終日午後3時まで）観覧無料

コレラ感染拡大阻止へ 日赤医療チーム派遣

「救えるいのちが救えていない」

インタビュー 名古屋第二赤十字病院 横江正道・総合内科副部長

2010年10月頃からハイチではコレラ感染者が激増。12月15日時点で11万7580人が感染し、死者も2481人を超えました。日本赤十字社は医療チーム第1班を11月15日に、第2班を12月13日に派遣。現在も支援を継続中です。

感染者、そして死者は日々増えていました。体力が落ちている人は潜伏期間が短く、感染後わずか数時間で発症。下痢が止まらず、体の水分が失われてしまいます。住民の皆さんに十分な知識がないため、医療機関に来るのが遅れてしまい、連れて来られた時には手の施しようがない患者さんも大勢います。

脱水症状を止めるためには経口補水塩の摂取が必要で、飲む体力がない人には点滴治療を行います。しかし、治療施設が少なく、救えるいのちが救えていない現実です。

医療と保健衛生を車の両輪に

私たちは赤十字国際委員会（ICRC）の要請を受け、約2000人を収容する刑務所内で患者治療を行いました。また、日赤ではポルトープランスの西側海沿いにコレラ治療センターを設置、活動を進めています。

設置にあたっては政府などとの調整も行いましたが、地元住民の方からの理解を得るのに苦労した面があります。正しい知識を持たないがために建設に反対する人が少なくないのです。

そうした意味からも、地元ボランティアを組織して保健衛生知識を普及する日赤の支援活動の意義は大きいと思います。医療と保健衛生は車の両輪。二つをうまく回していくことが、コレラ感染の拡大防止には不可欠です。

Sports スポーツとコラボ

Jリーグサポーター　新潟に活動をアピール

サッカーJ1アルビレックス新潟のホームゲーム最終戦が行われた12月4日、同チームとパートナーシップを組む新潟県支部は、15分のハーフタイムを利用して赤十字活動をPRしました。

青年赤十字奉仕団や看護学生など45人がグラウンドに立ち、横断幕や赤十字旗、着ぐるみを使って2万7000人の観客へ赤十字活動への理解と協力を訴えました。

参加者からは「応援席から見ていたグラウンドに立てるなんて夢のよう」「赤十字を応援してくれる人が少しでも増えたらいい」などの感想が出されました。

スタジアムの熱気にテンションは最高潮

子育てセミナーで　ロッテ伊藤選手がイクメントトーク　千葉

日本赤十字社千葉県支部が12月5日に開催した「小さないのちを守るためにできること　パパとママのための赤十字セミナー」に、プロ野球・千葉ロッテマリーンズの伊藤義弘選手がパパ代表として参加。オムツを替えたり、お風呂に入れたりの「イクメン」ぶりを披露しました。

同セミナーは、子育て世代を対象に幼児安全法を普及するためのもの。のどに異物が詰まったときの対処法や心肺蘇生法などの実技講習も行われました。

集まった参加者は約120人。夫婦の参加も多く、実技講習中は赤十字奉仕団が託児を引き受け、セミナーをサポートしました。

笑顔で自身の子育てについて話す伊藤選手（中央左）

早い！おいしい！非常食作りのコンテスト　山形

山形県支部は11月20日の災害防災訓練（南陽市防災センター）で「災害時の非常食コンテスト」を開催しました。

「ライフラインが止まった避難所で、1食当たり300円以内のこころ温まる副菜を45分内に20食分」などの条件で8チームが料理の腕を競いました。

訓練に参加した145人による試食と投票の結果、新庄市本宮一区赤十字奉仕団の非常食が優秀賞に選ばれました。

限りある調理時間。カギはチームワーク

優秀賞を受賞した「出し巻き卵の五目あんかけ・鳥もも肉のパイナップル添え」。エントリー作品のレシピは山形県支部ホームページ（http://www.jrc-yamagata.com）で公開中

誰もが楽しめる施設がオープン　鹿児島

全国の血液センターで初となる健康増進、献血啓発のための施設「ホリスティックヘルスプラザかごしま」が鹿児島県赤十字血液センターにオープン。11月27日にはオープニングセレモニーが開かれ、伊藤祐一郎日赤鹿児島県支部長（鹿児島県知事）らがお祝いに訪れました。

施設のコンセプトは「心と身体と生命の再生の森」。キッズ献血体験学習、献血ボランティア育成など献血啓発の拠点としての役割を担うとともに、献血に必要な健康づくりの場として、ヨガ講座や体力チェック、血管年齢測定など子どもから高齢者までが楽しめる施設を目指します。

オープニングフェスタでのヨガ体験

九州八県赤十字大会開催

常陸宮妃殿下ご臨席

「平成22年度九州八県赤十字大会」が11月25日、日本赤十字社名誉副総裁の常陸宮妃殿下ご臨席のもと長崎市内で開催され、有功章受章者やボランティアなど約1700人が参加しました。

赤十字事業に功労のあった方々へ常陸宮妃殿下からは有功章が授与され、妃殿下からは「九州八県の活動が確実な歩みを見せていることに、心から感謝の意を表します」とのおことばが述べられました。

おことばを述べられる常陸宮妃殿下

全国学生クリスマス献血キャンペーン

4500人が各地で献血の訴え

「助け愛　～献血は少しの勇気で出来るプレゼント～」をスローガンに各地の学生ボランティア団体がいっせいに献血を呼びかける「全国学生クリスマス献血キャンペーン」が12月1日から25日に行われました。

同キャンペーンは、冬場の血液不足を補うとともに、若年層への献血理解と協力を促すことを目的に、昭和63年にスタート。毎年12月に開催されています。今年は208団体、約4500人がキャンペーンに参加しました。

名古屋市中心部にある栄広場では、献血会場と併設した特設ステージに愛知県内の各大学から吹奏楽やダンス、バトンチームが次々に登場し、熱いパフォーマンスで献血への協力をアピールしました。

元気に会場を盛り上げたチアリーダー（愛知）

全国学生献血推進実行委員会の実行委員長、早坂樹さん（宮城）

多くの人でにぎわう都心の駅前で（東京）

ステージでは沖縄の伝統芸能であるエイサーを披露（沖縄）

新1年生の阿部寛さんも強力な助っ人となりました（鳥取）

心からの寄付に感謝

奄美大雨災害へ各地から義援金

10月末の大雨で被災した奄美地方の復興に役立ててほしいと、各地から温かい義援金が寄せられました。

〈岡山〉

アメリカの大型バイクを販売するハーレーダビッドソンバルコム岡山店から11月17日、同店が社会貢献活動として集めた義援金が寄せられました（写真）。

岡山仏教テレホン相談室からは11月26日、相談室主催の講演会で参加者に呼びかけて集められた寄付金が寄せられました。

義援金には社員以外の方も協力

〈大阪〉

大阪ガス労働組合から「被災された方のために有効に活用してください」と20万円が寄せられました。義援金は労働組合の基金の一部から拠出されたものです。

グリーン大阪農業協同組合からは11月30日、16万6652円が寄せられました。同農業協同組合が11月14日に開催した第13回農業祭のバザーの売上金をお持ちいただいたものです。

プロ野球日本一のロッテがチャリティー

千葉

千葉ロッテマリーンズの選手ユニフォームで作ったエコバックのオークションが11月21日に開催され、売上金34万3440円が千葉県支部に寄せられました。バックは千葉市赤十字奉仕団による手作りで選手名や背番号を生かしたデザイン。オークションでは、成瀬善久選手ら4選手が自身の愛用品と合わせてバックを販売しました。

主力選手みずからオークションでアピール！

JRC大会で子どもたちが街頭募金

福岡

第13回青少年赤十字（JRC）福岡県大会が11月23日、福岡市内で開催され、県内の小中高のJRCメンバー96人と指導者（教職員）73人が参加。活動紹介や体験発表の後、市内9カ所に分かれて街頭募金を行いました。貧困などに苦しむ海外の子どもたちの支援が目的で、13万9742円の寄付が集まりました。

〜〜〜

ミャンマー・サイクロン復興支援 学校再建事業

地域の期待浴び 60校を再建

「全村民が生涯をかけて大切にします」

2008年５月初め、ミャンマーを襲ったサイクロン・ナルギスは死者・行方不明者14万人、被災者240万人という大きな被害をもたらしました。日本赤十字社は緊急救援活動に続く復興支援事業として、学校再建事業にあたってきました。１年半にわたる派遣を終え、昨年10月に帰国した天田裕子駐在員に現地の様子などを聞きました。

復興支援の一環で衛生指導を受ける子どもたち

◆校舎は災害時の避難所に

日赤は2009年４月から、南部のエヤワディ地域で60校の建設を進めてきました。この地域はデルタ地帯で、雨季には一面が池のようになるところもあります。

「慣れないと立ち上がることもできないような小型ボートだけが交通手段です。10時間ほど乗っていたこともあります」

建設した学校は鉄筋コンクリート造りで、床が地面から1.5メートル高くなった防災強化型の建物です。

天田駐在員とキン・ミャット・モウさん（５年生）

「嵐や洪水の際には、住民の避難所にもなります」と天田さん。多くの地域では、日赤が建てた学校が村で唯一の鉄筋コンクリートの建物です。

天田さんが着任した当時、木とビニールシートで作った仮校舎で勉強していた子どもたち。「こんな丈夫な学校が建つなんて、考えたこともなかった」「村で一番の建物」と住民らは目を輝かせているといいます。

なかでも天田さんが印象に残っているのが、「全村民が生涯をかけて大切にします」という言葉。貧しくても子どもの教育に熱心な大人たち。「こういうところで貢献できるというのは、すごくうれしいことです」

◆村人参加で建設に工夫

屋根のひさしを別付けにしたのも、日赤が建設した学校の特徴です。強風によって仮にひさしが飛ばされても、屋根は残ります。災害の被害を最小限に抑える工夫です。

約250㎡の校舎はパーテーションで４クラスに区切られ１クラス平均約40人が学びます

学校建設に付随して地元で要望が多かったのが、「敷地の外周にフェンスを設置してほしい」というもの。理由は、学校に動物が入ってくるから。ヤギやブタが入ってくることもあるそうです。

校舎内は固定された壁ではなく、可動式のパーテーションで区切られています。先生が複数のクラスで授業したり、パーテーションを外してクラブ活動をすることもできます。

建設は赤十字まかせ、業者まかせではなく、村の建設管理委員会（村の代表、校長、赤十字職員で構成）が監督にあたり、一部の仕様変更を行うなど独自性も発揮しました。

◆大切に使われた救援金

全国から寄せられた寄付のうち、学校建設には３億6000万円が使われました。海外からの送金には通常10％の税金がかかりますが、同国政府は今回の復興支援事業に関する送金については無税としました。

事業管理費もほとんどが現地エンジニアの給与やボートレンタル料など必要経費だけに使われました。「まじめで地味なミャンマーの人たち。派手な式典などもほとんどなく、すべてを支援に注ぐというのがミャンマー赤十字社の姿勢です」

電気がきていない、電話が通じないという地域が多く、都市でも携帯電話は高価でインターネットもつながりにくいなど、不便さを極める中で行われた学校再建事業。天田さんには忘れられない光景があります。建設した学校に夏休み期間中に訪れ、関係者と話していた天田さんがふと気付くと、大人や子どもがどんどん学校に集まってきていました。

「皆さん、日赤に一言お礼を言いたいと集まってこられたんです。ミャンマーの人々がどれだけ私たちの支援に感謝しているのかを実感しました」

第６回アジア地域赤十字・赤新月血液事業シンポジウム

21カ国・地域から50人余が参加

各国血液事業発展へ議論

プレゼンテーションを行なうユユン所長

第６回アジア地域赤十字・赤新月血液事業シンポジウムが11月24日から26日までの３日間、都内のホテルで開催されました。同シンポジウムは、アジア地域の血液事業発展を目的として、日本赤十字社とタイ赤十字社の共同で３年に１度開かれているもの。過去５回はタイで開催されてきましたが、今回はタイ国内の情勢不安から、初めて日本での開催となりました。

ワナメティー・タイ赤十字社事務総長、ディングラ・WHO輸血安全部コーディネーター、ポール・ユトレヒト大学血液学准教授、ゼーバッハー・IFRC保健社会サービス部長をはじめ、21の国と地域から50人を超える人々が参加。

前回シンポジウムからの血液事業の進展状況を確認するとともに、各国の代表者が血液事業に関する情報交換などを行いました。

「経験を共有し、協力分野を探ろう」

開会式では近衛忠煇日赤社長が歓迎の挨拶。「現在、連盟の諮問委員会でも赤十字・赤新月社の役割を明確に記した『血液ポリシー』を策定している。共通の課題を抱える地域内の赤十字・赤新月社が、互いに経験を分かち合い、協力し合える分野を探っていくことは、時代の流れに沿ったものであり、各国の輸血医療に大きく寄与するものです」とシンポジウム開催の意義を強調しました。

各国から集まった参加者（一部）

続いてタイ赤十字社のワナメティー事務総長が「安全な血液の確保は血液事業の鍵です。社会的経済的な背景の異なる国々が集まっていますが、血液事業を担う団体としてなされる努力は同じです」と開会挨拶を行いました。

シンポジウムでは、インドネシア、バングラデシュ、韓国などアジア各国・地域から来日した参加者が「カントリーレポート」として各国の血液事業の進捗などを報告。さらに、「献血者募集」「成分輸血療法・輸血感染症」「ドナーと輸血患者の情報管理」などの各テーマに分かれてプレゼンテーションが行われ、活発な質問が取り交わされました。

参加者からは「難度は高いが興味深い内容。特に先進技術や研究の発表は勉強になった」（ユユン・インドネシア赤十字社中央血液センター所長）などの感想が寄せられました。